

○イチゴの害虫

アブラムシ類

(1) 本県での発生状況

本県のイチゴでは、ワタアブラムシの被害がほとんどで、まれにイチゴケナガアブラムシの寄生が確認される。定植直後から発生はみられるが、春季になり気温が高くなってくると防除のタイミングの遅れから、ススによる汚れの発生が目立つようになる。

近年、チリカブリダニ等の生物農薬を使用する生産者が多くなり、殺虫剤の使用をひかえるほ場において、イチゴケナガアブラムシの寄生を見かけることが増えている。

(2) 形態及び生態、被害の様子

○ワタアブラムシ *Aphis gossypii* Glover

野菜・花の害虫(アブラムシ類)－ワタアブラムシ参照のこと

冬季加温するイチゴでは、ワタアブラムシは周年発生し無性世代を繰り返す不完全生活環を営む。



図1 イチゴ果茎に寄生するワタアブラムシ

○イチゴケナガアブラムシ *Chaetosiphon fragaefolii* Cockerell

雌成虫の体長は 1.2mm 程度で、成虫、幼虫とも淡黄色から淡緑色の中形で長卵形のアブラムシ。寒冷地に多く、暖地の平野部では発生しないといわれている。イチゴ以外の寄主植物は不明だが、育苗期間から本種の寄生が確認され、成幼虫が寄生した苗から本ほに持ち込まれる。低温活動性がワタアブラムシよりも強いといわれており、多発生するとワタアブラムシと同様に排せつ物による汚れやススが発生する。薬剤防除をしていればほとんど発生は問題にならない。



図2 イチゴケナガアブラムシ成虫

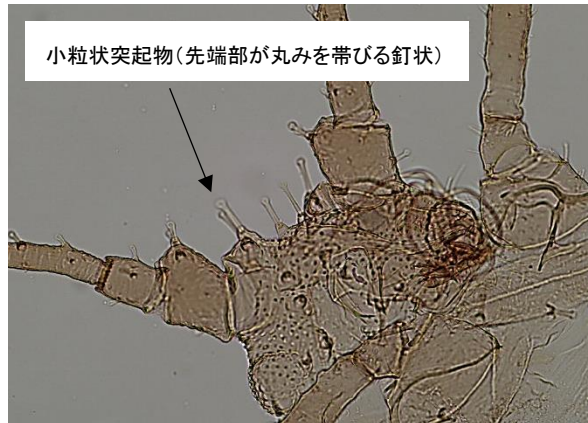


図3 頭部顕微鏡写真(小粒状突起物が散在)

(3) 防除対策

施設開口部を防虫ネット(1mm 目合い以下)で覆い、施設内への侵入を防ぐ。

アブラムシ類に適用のある粒剤の定植時処理により、生育初期の発生を抑える。生育期間中は花梗等への寄生を指標として、アブラムシ類が分散する前に防除する。

天敵製剤としてコレマンアブラバチ剤の登録があるが、活動適温が 20～30℃と高いため越冬期の効果は期待できない。

コナジラミ類

(1) 本県での発生状況

本県のイチゴではオンシツコナジラミの発生が問題となる。定植直後から成虫を見かけ、通常は1月ごろから徐々に寄生程度が高くなり、寄生密度の高い場所から葉や果実の汚れ等が生じる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

○オンシツコナジラミ *Trialeurodes vaporariorum* Westwood

野菜・花の害虫(コナジラミ類)ーオンシツコナジラミ参照のこと

(3) 防除対策

ラノーテープの導入が進み、重度の被害発生ほ場は少なくなってきたが、散布剤で対応する場合は、卓効を示す散布剤が少ないため、低密度時から防除を実施する必要がある。また、蔓延した場合は、強めの摘葉で幼虫や蛹の寄生する古い葉を処分し、寄生密度を下げてから防除する。



図4



図5



図6

図4 オンシツコナジラミの寄生状況

図5 オンシツコナジラミによるスス被害(汚れ)

図6 ラノーテープ使用状況

(1) 本県での発生状況

本県のイチゴでは、ナミハダニの被害がほとんどで、時折、カンザワハダニの寄生が見られる。春季になり気温が高くなってくると増殖スピードが速くなり、防除が間に合わず被害が発生する生産者が多い。

(2) 形態及び生態、被害の様子

○ナミハダニ *Tetranychus urticae* Koch

野菜・花の害虫(ハダニ類)参照のこと

イチゴでは休眠せず、栽培期間を通して発生する。また、通常は淡黄緑色の個体群が多いが、まれにナミハダニ赤色系と呼ばれるえんじ色から赤い個体群も観察される。薬剤感受性低下の報告が多くあり、本県イチゴに寄生するナミハダニでも薬剤感受性低下を確認している。ほ場により程度の差はあるが、卓効がある剤は限られてくるので、薬剤系統の異なる農薬のローテーション散布を行う必要がある。

○カンザワハダニ *Tetranychus kanzawai* Kishida

野菜・花の害虫(ハダニ類)参照のこと

イチゴでは休眠しない。薬剤感受性低下の報告はあるが、ナミハダニより薬剤はよく効く。

(3) 防除対策

野菜・花の害虫(ハダニ類)参照のこと

近年の栽培品種「ふくはる香」や「とちおとめ」等では、発生初期にカスリ状の被害痕が見られないので、収穫や摘葉等の作業時に、寄生の有無を注意して観察すると防除適期を逃さない。

イチゴ栽培では薬剤感受性の低いナミハダニ個体群が増えており、薬剤だけで対応することは難しくなっている。ハダニ類の防除に苦慮している場合は、カブリダニ剤(チリカブリダニ剤、ミヤコカブリダニ剤)等を組み入れた総合防除に取り組むことを考慮してほしい。



図7 イチゴの被害(多発したナミハダニの吐糸によりクモの巣状となったイチゴの株)

ホコリダニ類

(1) 本県での発生状況

野菜・花の害虫(その他のダニ類)参照のこと

本県ではチャノホコリダニ、シクラメンホコリダニのいずれの被害も確認されている。カブリダニ剤の導入によりダニ剤を散布していないほ場で蔓延した事例や、ホコリダニ類の果実被害がアザミウマ類の被害果とよく似ているため、薬剤選択を誤って蔓延してしまった事例がある。

(2) 形態及び生態、被害の様子

○チャノホコリダニ(*Polyphagotarsonemus latus*)

○シクラメンホコリダニ(*Phytonemus pallidus*)

成虫の体長は雌でチャノホコリダニは約0.25mm、シクラメンホコリダニで約0.2mm、雄は双方ともに約0.2mm、体色は淡黄褐色で、成虫の形態やイチゴ被害症状もよく似ている。卵の形状がチャノホコリダニは扁平、シクラメンホコリダニは長卵形で卵の形態が異なるので区別できる。きわめて微小なので、ダニの寄生を確認することが難しい。イチゴでの被害は新葉の萎縮、幼果の褐変、葉の奇形、さらに症状が進むと生長点が褐変し、芯どまりとなる。



図8 チャノホコリダニ成虫

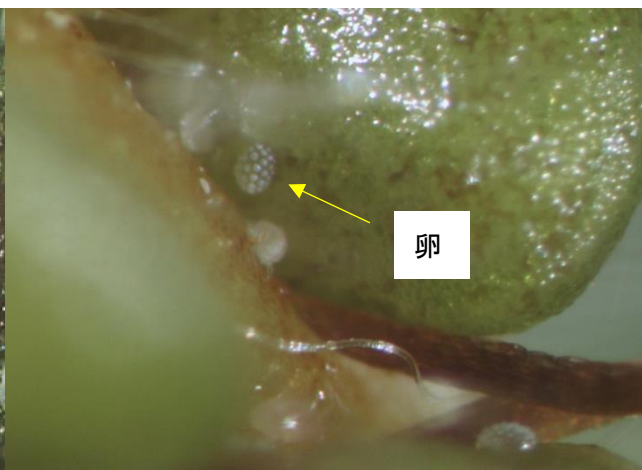


図9 チャノホコリダニ卵

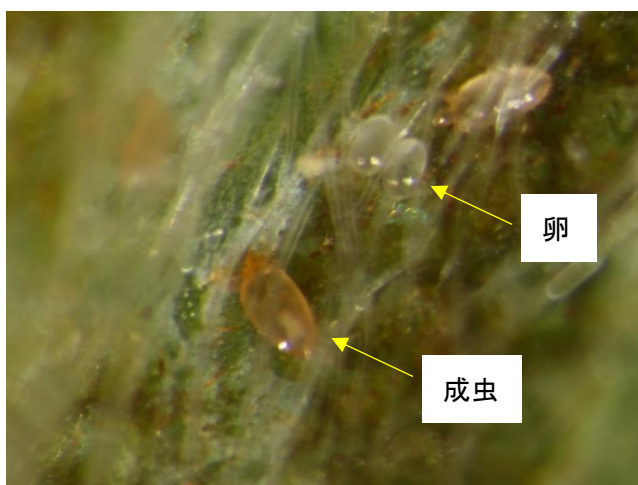


図10 シクラメンホコリダニ成虫、卵

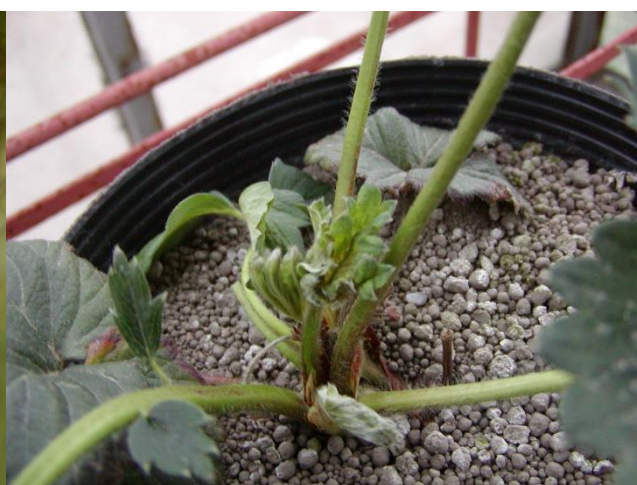


図11 ホコリダニ類新葉の被害

(3) 防除対策

育苗期から薬剤防除を徹底し、本ほに持ち込まない。

新葉の萎縮や葉の奇形があった場合は、ホコリダニ類の被害の可能性が高い。カブリダニは本種を捕食しないので、カブリダニ剤を使用している場合は、カブリダニに影響のないダニ剤を使用する必要がある。生長点付近の新葉や幼果などに寄生するので、薬液が到達するよう丁寧に散布する必要がある。



図12 ホコリダニ被害果(軽度)



図13 ホコリダニ被害果(重度)

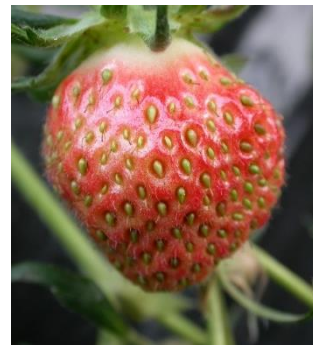


図14 アザミウマ類被害果

アザミウマ類

(1) 本県での発生状況

イチゴの花で寄生が確認されるアザミウマ類は、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマ等であるが、果実被害を引き起こす種はミカンキイロアザミウマとヒラズハナアザミウマで、ネギアザミウマは花での寄生数が多くても被害果はみられない。冬期間に被害が発生することもあるが、多くの場合は、春期になり側窓を開放する頃から発生が多くなる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

野菜・花の害虫(アザミウマ類)参照のこと

イチゴでは、成虫が花に多数集まって産卵し、幼虫が果実等を加害する。果面が食害されると初期は種子周辺がリング状に黄色～オレンジ色に変色し、ひどくなると果実全体が黄化、褐変し、光沢のない硬い果実となる。

(2) 防除対策

野菜・花の害虫(アザミウマ類)参照のこと

果実被害が見られる場合は、薬剤による防除を行う必要があるが、発生種がミカンキイロアザミウマの場合は卓効を示す剤が少ないので、種を特定することが重要である。また、アザミウマ類の被害果はホコリダニ類の被害果とよく似ているため、被害果の状況だけで薬剤を決定すると、全く薬剤散布の効果がないことがある。



図15 ミカンキイロアザミウマの被害果



図16 花に寄生するミカンキイロアザミウマ

チョウ目害虫

(1) 本県での発生状況

本県では、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ハマキガ類、ネキリムシ類、クロモンキノメイガ、ナシケンモンなどの寄生が見られるが、被害の大きいものはハスモンヨトウによる定植直後の苗で、その他のチョウ目害虫では実害になるほどの発生はみられない。

(2) 形態及び生態、被害の様子

野菜・花の害虫(チョウ目害虫-ハスモンヨトウ)参照のこと

イチゴでは新葉や花、蕾、果実を好んで食害し、防除がうまくいかないと12月ごろまで被害が継続する。施設側窓等の防虫ネットに直接産卵することがあり、若齢幼虫が施設内に侵入して被害を出すことがあるので、防虫ネットを過信せず、施設内の発生状況に注意を払う必要がある。

(3) 防除対策

野菜・花の害虫(チョウ目害虫-ハスモンヨトウ)参照のこと

ハスモンヨトウは薬剤感受性が低下していることに加え、老熟幼虫は分散し、日中は日陰や地際部に潜み夜間に加害する。若齢期で葉裏を集団で加害しているうちに発見し、防除を実施する必要がある。

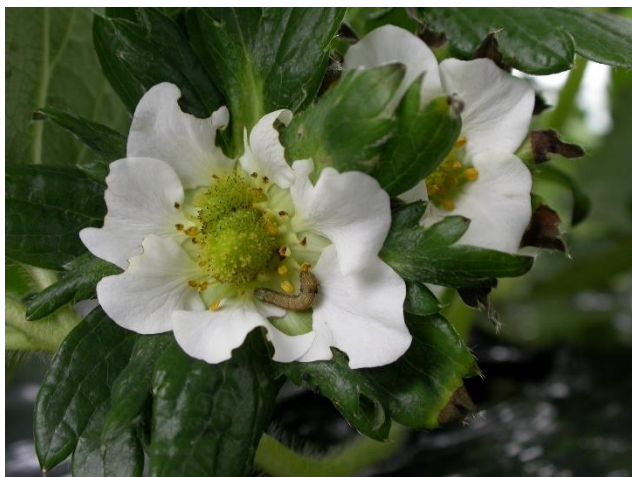


図17 花を加害するハスモンヨトウ幼虫



図18 ハスモンヨトウ若齢幼虫